

## 呼吸器学百年史編集委員会

## 『呼吸器学百年史——二十一世紀へのメッセージ』

本書は、日本内科学会創立百周年記念事業の一環として刊行された日本内科学会雑誌の呼吸器分野の特集、「内科—百年のあゆみ(呼吸器)」を補完するということで、日本呼吸器学会から本年六月刊行された(日本呼吸器学会理事長)。本書の刊行目的からしても、上述の内科学会発行の特集と両方に、目を通していただくことが期待されている訳である。序文の執筆者は両誌同一人であり、編集責任者もそのように考えられるから、内科学会から呼吸器学のために提供されたスペースが十分でない、本誌の刊行を日本呼吸器学会は決めたのであろう。同類誌が他の内科関係学会からも刊行されているか否かは知らない。

百年というのは、年代学的に見栄えのよい単位である。『東京大学百年史』、『東京大学医学部百年史』、『金沢大学医学部百年史』、『岡山大学医学部百年史』、『長崎医学百年史』、これらのようにその先例を挙げることは難しくない。しかし、大医学史、会社の社史などの場合はさておき、学会関係のこの種の書籍を刊行するとなると、いろいろと気になることが目につく。

当該百年の初期の時代に活躍したパイオニアというべき先達には、当該史への発言の機会はない。彼らの業績が当該史に記録されるか否かは編集者の判断による。それだけに、彼

ら先達の業績への配慮は慎重であらねばならない。彼らとは対照的に、現に盛んに活動している当該史執筆者は、やはり自分たちの時代に過大な重みをつけて記述する。

新しい知見は即座に発表され、グローバルに拡散する。情報収集の容易さは、ますます促される。当該学術分野は、日々ともいえる速やかさで、さらにさらに分化していく。今後百年の変貌の様は、当然今までの百年を上回ろう。

この種の刊行物には、年譜は当然のことながら欠くことができない。しかし、その作成は必ずしも容易でない。内科学会の年譜には記述され、呼吸器学会のそれには欠如している事績、またその逆の場合もある。さらに、当然記録されるべきであるが両方にならない事績がある。一例を挙げれば、昭和五年第三十回日本外科学会での、東北大学関口外科と京都大学鳥潟外科の間で繰り広げられた「平庄開胸論争」は両方の年譜に欠如している。外科学会での論争であるとはいえ、わが国の呼吸の生理、心臓・呼吸器外科、呼吸器内科の二十、二十一世紀の展開に大きな影響を及ぼした先人の事績である。さらにまた、この種の刊行物に記録されるべきか否か問題になるものも出てくる。

百年の各時点にあつて、呼吸器がどのようにあつたか、そして全体としてどのように展開してきたかを記述することが、この種の刊行物の大きな目的であろう。細分化した各分野を記述することは容易であるが、統合をすることはいつの時代にあつても簡単でない。

本誌に目を通して改めて実感するが、戦後から二十世紀の前三／四期までは、米欧から新知見を導入することに血道を上げた時代であった。明治初期の海外留学時代を彷彿とさせずらす。その活発な海外知見紹介の陰で、海外一流学会誌にと必死にチャレンジした若い医学徒の業績を浮かび上げることができないのが残念である。学会賞を授与された業績はどこに示されているのであろう。

百年は、期間が大きすぎる。大きくとも五十年の単位くらいにして、各世代の会員により均等に発言の機会を確保するのはどうだろう。また、少なくとも五年前くらいから十分に時間をかけて、編集委員会で資料を渉猟、検討する必要がある。「呼吸器学百年史」とされているが、日本呼吸器学会は昭和三十六年に結成された。現在四十余年を過ぎた時点にいる。まさに、日本呼吸器学会五十年史を立案してよいタイミングでないだろうか。

コメントばかりになったが、まさにこの種の刊行物編集の難しさを実感した。本誌の編集、刊行に関わられた諸氏のご努力に、深く敬意を表する。今後の学会史刊行のために幾ばくかの助言になることができれば幸いである。

(吉良 枝郎)

〔日本呼吸器学会、千代田区神田二一六―四 柴田ビル二階、電話〇三―三二五四―五二三五、二〇〇三年六月十四日、A四判、四一九頁、定価一〇〇〇〇円〕

## 編集後記

編集委員に任命されて数年になるが、時々私用で欠席することがある。この十一月の委員会は欠席してしまった。従って近々の問題点について書くことが出来ない。申し訳なく存じている次第です。

本誌の原著投稿がこの一カ年間に増加しており、その内容も多彩化しジャッジをお願いするのに一苦労することが多くなった。

この編集委員会の構成を見ると医学出身二名、薬学出身二名、人文出身三名となっており、年齢構成では六十歳以上三名、六十歳以下四名であり、特に医学出身の二名は高齢者である。委員の居住地で見ると東京が三名、神奈川三名、埼玉一名となっている。

新しい分野の論文も増加しているので東京居住の医学出身の若い方に焦点を絞って編集委員適任者を探し出す努力も必要となってきた。(中西 淳朗)

## 訂正とお詫び

以下誤植がございました。訂正を致しますとともに、お詫び申し上げます。(編集部)

第四十八巻第四号 英文目次 五九七頁

(正) An Outbreak of Epidemic Louse-Borne Typhus in Tokyo 1914: A Study on the Prevention of Epidemics

(誤) An Outbreak Epidemic Louse-Borne Typhus in Tokyo 1914: A Study of the Prevention of Epidemics

第四十九巻第三号 四六四頁 左より三行目

(正) ……金泥下絵を以て…(誤) ……金泥下絵を以て…

同 五七五頁下段 左より五行目

(正) ……一部は四書誌…(誤) ……一部は四雜誌…